

テーマ「災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について」

宗教的世直し思想について

宗教の三つの力—民衆力・世直し力・自由の創造力

金子 昭（天理大学おやさと研究所）

I. 天譴論でも神義論でもなく

◎天譴論：

- ・蓄積された人間の過失が神仏の怒りを招いた結果、かくかくの災害が起こった。
- ・過去志向的な因果論の文脈。人々を意気消沈させる。自然災害と人的行為との関わりに対して、最も安易で傍観者的な解釈。

⇒天譴論を最も説いてはならないのが宗教者。

◎神義論（弁神論）：

- ・このような苦難が起こったのも、万能で至善な神仏による深い思惑がある。
- ・この世界の不条理を、強引に楽観論的合理主義で説明しようとする。

⇒多くの宗教者は東日本大震災に際して語るべき言葉を失ったはず。

現実の世界は性急な合理的解釈を拒む手ごわさを持っている。この問題に徒な思弁をこらす前に、つきつけられた現実そのものに直面し、その中で各人が何をなすべきか、自分に可能な手助けを行うのが先決。実際、多くの宗教者は大災害の報道に接するや、ただちに立ち上がり、まず被災地の人々への救援、または後方支援へと自らのあり方を定位したのである。これは正しい方向性であった。

↓

◎宗教を測る究極の尺度：世界の教義的な解釈には存しない。それはむしろ、人間をいかに生き生きと倫理的実践に促すかどうにかかっている。

拠って立つべきは、私たちの内なる超越的存在の臨在。苦難や孤独の中であってこそ、神仏の臨在が痛切に感じられる。どんなに危機の中にあろうと、自分がなんらかの神仏と共にあると自覚しているとき、私たちは確かな地盤の上に立っていると感じる事ができる。そして、私たちがなすべきことは、神仏の臨在の下に生きていることを自覚しつつ、人間として直面する難問をねばり強く解決していくこと。

⇒そうした実存的潜在力は、実はだれもが持っている。

II. “世直し力”の本質は“民衆力”

◎草の根の「世直し」の対極にあるもの：首長のトップダウンの独裁「改革」

震災後に新たな宗教ブーム、宗教教団ブームは起こらない。(橋下徹氏の「大阪都」はカリカチュアされた“地上天国”構想。時代の閉塞感はこのような上からの改革では突破できない。むしろ超勝ち組首長による独裁ポピュリズムにより、人々の間に無力感と依存心が蔓延。過剰な公務員叩きは、市民の間に官民の分裂とねたみあいと息苦しさをもたらすばかり)。草の根の「世直し」⇒このような上からの「改革」とは全く無縁。

◎世直しの担い手⇒どこまでも民衆である。

田中正造(1841〔天保12〕～1913〔大正2〕)の鉋毒反対闘争：福島第一原発の事故を受けての反原発運動に重ね合わされ、多くの人々から注目されているが、その射程は草の根民主主義に基づいた常に絶えざる「世直し」の運動へと伸びている。

原子力発電は、お上が産官学の挙国一致で推進してきた国策であるが、いまや原発事故によって、その危うさは白日の下に曝されてしまった。こうした巨悪に対し、身をもって立ち向かう者は在野の力、民衆以外にありえない。そして、在野中の在野たる宗教者こそ、人々を先導する力となるべきである。

⇒これが“民衆力”としての民衆宗教の力となる。

*今でこそ、伝統宗教と新宗教という区別が出来ているが、もともとは今ある伝統宗教だって、出発点はみな民衆宗教なのだった。大衆宗教というものは存在しない。一人一人の人間を大切にすれば、その宗教はいずれも民衆宗教である。

◎宗教者とは、肩書きではなく、生き様である。

ここでの宗教者イメージ：悟りすました僧ではなく、民衆の中に分け入って活動する聖(ひじり)のような存在。職業的宗教者と在家の求道者の相違、伝統宗教と新宗教という区別もさして意味がない。宗教がかけがえのない一人ひとりの人間を大切にすることが、それは真の宗教としていずれも民衆宗教なのである。

民衆宗教は、社会の構造を内側から変革する。そのためには、最も低い立場に置かれた人々と同じ目線に立たなければならない。「世直し」もまた、この内面性の変革に由来する。

◎超越的な存在とのつながりにおいて内面性が豊かである人間が真の意味で宗教者。

倦まずたゆまず、人々のために黙々と尽くしている人は、自ら意識しているか否かを問わず、実はきわめて宗教的な人。そうした人は、活動への無限のエネルギーを得る火種を自らの内に絶やすことがないが、その火種は超越的な存在から贈られたもの。

(1)世直しの性格1

「文明の転換」としての「世直し」：それは人間の内面的革新から生まれる。

E・フロム：現代文明やそこでの生活様式を「持つ様式」の最たるものとして表現。

大災害はまさにこれらの人間の「持てるもの」を直撃する。これらのものは皆、私の外側にある存在である。これに対置されるのが、「ある様式」である。私と

いう人間の中心は、どこまでも私自身の中にある。それは私の内奥から湧きあがってくる人間的な力であり、それに即して生きることそのことである（「生産的能動性」）。それはまさに、私という人間が「ありたい」という、実存的な自己実現への意志にほかならない。また、その達成には心中深くから喜びが必ず伴う。これは、「持てるもの」がすべて取り去られても存続する不朽の“いのち”である。⇒突如として出現する大災害は、人間の「持つ様式」を激しく揺さぶり、これら二つの様式が人間の実存的な二者択一の可能性であることを暴露する。このとき、「ある様式」における「生産的能動性」を、超越的存在に由来する普遍的な救済意志の現われとして自覚するのが宗教者である。

*宗教的真理は、「持つ様式」にどっぷりと浸っている宗教それ自体にとって危険なものもある。 Cf. ドストエフスキー「大審問官」。

(2)世直しの性格 2

「谷底せり上げ」としての「世直し」：民衆宗教と草の根民主主義との関わり

「せり上げ」とは、歌舞伎などで、役者が舞台の上に下の方から上げられる仕掛けのこと。同じように社会の周辺や谷底にいる人たちが、社会の表舞台に「せり上がり」、社会変革の一翼を担わなければならない。そこからこの世の高山や高地へと逆流を起こす「世直し」的契機も出てくる。

古来より、人々は自分たちの力で世直しをしようと立ち上がってきた。時代は変わっても、その気概は私たちの中に脈々と伝わっている。

⇒これが草の根の民主主義。そうした気概を自ら身をもってなしうるのが宗教者。

◎「世が直る」とは：生命力が更新されるということでもある。

・稲妻やひと切づつに世が直る 小林一茶「おらが春」

(稲妻がピカリ、ピカリと光るたびに作柄がよくなってゆく)

*参考：荒木博之『日本語から日本人を考える』（朝日新聞社、1980年）。

・中山みき「みかぐらうた」より一下り目

四ツよのなか (A そうしたならば世界に B 豊年満作の)

五ツりをふく (A 守護、恵みが現われて B [豊年満作の] 理が吹いて)

・同二下り目

三ツみにつく ([そして] 幸せが身につき)

四ツよなほり (この世は立て替わる)

五ツいづれもつきくるならば (どちらの者も皆この道についてくるならば)

六ツむほん(謀反)のねえ(根)をきらふ(切ろう)

七ツなんじふ(難渋)をすくいあぐれば(救い上げれば)

八ツやまひ(病)のね(根)をきらふ(切ろう)

⇒だれもがこの教えに付き従うならば、神は力強く積極的に、この世の謀反や難渋や病気の根を断ち切っていく。積極的な社会変革的内容。みきにおける神のメッセージは明らかに、不平等な世の中、さまざまな不幸せに満ちた世の中を変革していくことにある。

*参考：道友社編『みかぐらうたの世界をたずねて』(天理教道友社、2001年)。

- ◎ 神人和樂の陽氣ぐらし世界へ一人間の助け合いが神の救済を引き出す
このさきハセかいぢううハいちれつに よろづたがいにたすけするなら 十二号 93
(この先は世界中の人間が互いに助け〔扶け〕をするならば)
月日にもその心をばうけとりて どなたすけもするとおもゑよ 十二号 94
(神も人々のそうした助け心を受け取って、神ならでの助けをすると思えよ)

Ⅲ. “世直し力”の内には自由の“創造力”がある

◎未来から来る宗教の救済力：

苦しんでいる同胞や衆生の姿は、自分だけが安閑として生きていてよいのかという、負い目の感覚を持たせる。これは更に、自分に可能な責任を果たしていかなければという、止むにやまれぬ思いとして現れる。この思いが社会変革を促す希望の力となる。

⇒希望とは、未来を自分のところに来させようとする現在の姿。

希望とは、たえず能動的で主体的なもの。その意味では、受け身かつ傍観者的な期待とは区別される。なによりも、この世の問題に気がついた私たち自身が、下からの民衆力で自分たちを押し上げ、せり上げていかななくてはならない。上から社会を改革してもらうことを待っている、何も始まらない。いや、むしろそういう受け身の姿勢が一番危うい。人間には希望が本質的なものである(フロム:人間とは「希望する人 homo esperans」)

◎宗教の持つ、人間を苦難から解放する自由の“創造力”がある。

宗教的信仰を通じ、超越的な仕方で救済の可能性を無限に羽ばたかせることで、過酷な現実を乗り越えていくことができる。生存がいかに悲惨や苦悩に満ちていたとしても、それをこの現実には左右されない究極的な未来から超越的に意味づけることができる。どんなにこの世の現実には打ち砕かれても、そのように自らの生を未来から超越的に位置づけるならば、それは新たな意味世界の経験となる。希望の想像力は、人間を苦難から解放する自由の“創造力”でもある。

(1)創造すべきもの1：この世における“善の循環”

現代の聖とは、この世にあって、この世を超えた境地から、この世に自由に関わる存在である。そうした姿勢を自ら示すことで、宗教者は、従来の血縁や地縁を超えた、“宗教縁”とも言うべき縁でもって、人と人とをつないでいくことができる。

それは、支援というよりは、むしろ“支縁”、つまり人々に寄り添い人々の縁を支えていく営みである。宗教者の役割は、人々の間に分け入り、人々の縁作りのために力を貸していくことにある。そうして縁を支えられた人が、今度は別な人の縁を生み出し支えていく“善の循環”。人々の間にたすけ心を喚起し、人間相互のたすけ合いの世界を現出させること、これが宗教者による草の根の「世直し」である。

(2)創造すべきもの2：“精神（霊）の共同体”

ソボールノスチとは、精神（霊）に目覚めた人格と人格との自由な良心に基づく交わりである（バルジャーエフ）*。たとえ信仰対象や教えが違っても、宗教者（信仰者）

同士の間にも一種の精神（霊）的共同体は成立しうる。それは、自分たちがそれぞれの宗教を信じていることから、その象徴的表現形態は異なっても、それぞれに神仏の超越的存在につながっていることに由来する、精神（霊）的な連帯感があるからである。

さらにいえば、宗教に所属しているいないにかかわらず、何らかの精神性（霊性）に目覚め、人格相互の自由な交わりがあるところには、どこにでも精神（霊）的共同体、ソボールノスチが成立する。それは人格的な交わりを強調するという意味で、宗教の個人化や癒し志向に見られるようなスピリチュアルブームの現象とは一線を画す。

*『人間の運命—逆説的倫理学の試み』（ベルジャーエフ著作集第3巻、野口啓祐訳、白水社、1966年）、370頁以下を参照。

IV. “善の循環”による“無縁社会”の突破：仏教慈濟基金會の課題

◎慈濟基金會（慈濟会）：500万人にも上る会員を有する世界最大の仏教 NGO

台湾の財団法人・仏教慈濟基金會（以下、慈濟会と略称〔同会では慈濟[Tzuchi]と呼称〕）は、その教えの中に明確に“無縁社会”解決を目指す理念を持ち、その理念の下で積極的な実践を行っている社会参画型宗教。その活動には、慈善・医療・教育・人文の主要四志業（事業）に、国際救援・骨髄バンク・環境保護・地域ボランティアの四つを加えた「四大志業八大脚印」があり、いわば NGO の総合商社のようなものである。

◎「無縁大慈、同体大悲」

- ・無縁大慈：無縁の者にも大きな慈しみをかける大きな愛（大愛）のこと。
- ・同体大悲：同じ体であればどこが痛んでも自分の痛みとして感じるように、衆生の苦しみを自分の痛みとして受け取るという意味。

⇒この理念において、“無縁”を“有縁”化する思想が語られている。そして、そのような働きを行う者は皆、「人間菩薩」である。

- ・仏の目から見れば、人間的にはたとえ無縁の者でも仏の大きな慈悲心で包めば、すべてが有縁の存在となる。この慈悲の精神（霊）は、儒教の仁愛、キリスト教の博愛、天理教の親心ともつながる。⇒精神的（霊的）共同体。この精神を有するならば、だれもがお互いに関わり合う存在であることに気がつかざるをえない。⇒慈濟会の活動は、こうした基本理念に基づく仏教ヒューマンイズムの展開。

◎“善の循環”による“無縁社会”の突破

たとえ悪しき因縁因果の連鎖があっても、自分のところでそれを断ち切って善の縁につなぎ換え、さらに悪縁を良縁に転換することで、人間世界を織り成す因縁因果の「縁」を全体として「善」が循環する姿に変えていく。⇒人間菩薩の再生産という運動。

- ① 菩薩ネットワーク（菩薩網）の展開である：自ら発心して菩薩道へと目覚めた人が慈悲喜捨の実践を行えば、それにより多くの人々がたすけられる。そのたすけられた人が今度は、自らも菩薩道に目覚め、多くの人々をたすける。そしてここでも、たすけられた人が発心して慈悲喜捨の実践を行う。

*「利他行 altruistic practice ネットワーク」（稲場圭信）。

参考：稲場圭信『利他主義と宗教』（弘文堂、2011年）、192頁。

- ② 心の内面における循環的展開である：菩薩行の利他的実践により、これを実践する者の「仏性」が磨かれ、自らの「仏性」がそのように磨かれるなら、なお一層その人は菩薩行に励むことになるのである。これは活動そのものにおいても、「救援」と「救済」とが一体化した展開になっている姿である。
- ③ この循環過程は慈済会の拡大生産過程でもある：「善の循環」が慈済会への活動へと人々を取りこんでいくことにより、救援活動を通じての布教活動にも似た現象が出てきている。慈済会では、仏教の宣伝はしないと宣言しており、またあくまで社会貢献のNGOであると称しているが、実際には独自の文化や団体精神を有する慈済会の入会促進、または慈済精神による指導が行われている。

◎学校建設の意向をめぐる懸念

慈済会は東日本大震災でも大規模救援活動。住宅被害見舞金：2011年6月～12月の半年で25被災地市町約10万世帯。金額は50億円を超える。

同会は被災地に自前で学校を建てることをも申し出ている。（台湾大地震後に50校以上の学校の校舎を自前の資金で建築した実績があり）。ただ、いささかの懸念：同会による建設をめぐり、先住民族との間で一種の文化摩擦が発生した事例。慈済会に学校を建ててもらった場合、後々の教育方面において慈済会として、教育内容にも慈済の精神文化を反映してほしいなどの要望や指導が入ることもありうる。むしろ、自力復興の策を採用したほうが被災地の精神的な独立自尊のためになると、私は強く思っている。

◎非日常が日常に戻るときにその真価が問われる

慈済会の大規模救援：被災者の人々が感激したのは、自分たちのためにわざわざ台湾の団体が遠方から駆けつけてくれて、これほどまでに尽くしてくれたという要因が大きかったように思う。だから、それが直ちに日常生活での関わりの中においても、一般の人々に受け入れられるという保証が必ずしもあるわけではない。

被災地の生活においても、非日常が日常に戻る時が来る。そうした時、お互いの文化や慣習、宗教的背景の相違が明瞭に意識されてくるはずである。この時こそ、彼我の相違を尊重した実り豊かな交流がはじめて可能になるだろう。慈済会には、今以上に地道な交流を継続させていくことを、私は期待している。

◎ソーシャルキャピタルの二類型：橋渡し型と結束型の総合がここでも問われる

今回の震災救援活動は慈済会だけで行われたいわば孤立した活動でもある。義援金給付も群を抜いて金額が大きいだけに、他の民間団体にとっては抜け駆けるようなパフォーマンスにも映らなくもない。その意味で、慈済会の「善の循環」も、今後は外側に対してより一層開かれたものであってもよいのではないか。

今後の長期的支援にあって、慈済会はソーシャルキャピタルとして、自らの独自性・固有性を保ちつつ（結束型）、どこまで多様な文化、多様な生き方と共存共栄していくか（橋渡し型）が問われてこよう。

⇒教団・宗教の別を超えた霊的（精神的）共同体〔ソボルノースチ〕 以上